

## ピエール・ロチ「死に絶えた過去の中で」翻訳と注

遠藤文彦

### はじめに

以下に訳出するテキスト「死に絶えた過去」(« Dans le passé mort ») は1891年6月27日付け『ル・モンド・イリュストレ』誌 (*Le Monde illustré*) に掲載され、1891年7月刊行のエッセー集『憐れみと死の書』(*Le Livre de la pitié et de la mort*) に再録された。翻訳に使用したのは、2000年編纂刊行された小品集 (*Nouvelles et récits, textes réunis et présentés par Guy Dugas et Alain Quella-Villéger, Paris, Les Presses de la Cité / Omnibus, 2000*) 所収のものである。

われわれがこのテキストに関心を向けたのは、それが映像としての写真に関する記述を、末尾においてごく短くではあるが、非常に意味深い形で、とくにテキスト全体の語りの対象である過ぎ去った時の想起——あるいはむしろ幻視——というテーマとの本質的関連において含んでいるからである。

事実、ロチが回顧する経験は「唯一絶対に実現しえない、神にとってさえ不可能な欲望」に端を発している。その欲望とは、すなわち「ほんの一瞬でもいい、過去に、過ぎ去った時代の深淵に、多少とも遠い昔の早朝のすがすがしさに立ち戻りたいという欲望」である。これは単に過去を思い出すこと、思い起こすことではなく、過去をごく感覚的に、とりわけ視覚的に知覚すること、すなわち文字通りに視ることである。むしろこの視覚は、それを可能にする感覚刺激の源泉がもはや存在しないのであるから幻覚の類に属する。

かくしてロチが語る話は三つのエピソードからなっている。まず彼は、幼少時に、目の前にいる姉妹(祖母と大叔母)の姿を通して亡くなった彼女らの姉妹の姿を鮮烈な感覚をもって知覚する(「そのとき、突然、過ぎ去った時の印象が私の脳裏をよぎった。それは生まれて初めて感じた、じつに鮮烈で、はっとするような、ほとんど恐ろしいとさえ言えるほどの印象で、もはや私自身に確実に属しているとは思えないような諸々の感覚の記憶を伴っているのであった……。)」つぎに、「つい先ごろ」のこと、著者はふとしたことがきっかけである過去のことを「思った」、すなわち想起した。そこで彼はさらにつぎのようなことを希求する——「ああ、なんて魅惑的なことだろう、なんて憂鬱な娯楽であろう、1820年か1830年の五月の黄昏時のこの界限の光景を、そして、

当時の若い娘たちが古めかしい衣装と身のこなしで、夕涼みに散歩に出かけたり窓辺に姿を現わしたりするところを、たとえ一瞬でも再び目にすることができたなら! ……」)。しかるに彼はそのような希求に応える夢を見る、あるいは、夢の中でそのような願望を実現する——「そんなことがあって、次の夜のこと、私はくだんの白昼夢の間にかくも強烈にみずからの眼前に思い描いた光景を夢の中で見たのである。」最後に、コルシカでナポレオン・ボナパルトの生家を訪ねたおり、思いがけず、その家で生起したであろう過去の光景を視るという経験を——「そこで、昔の衣服に身を包んだ、後に皇帝となった風変わりな子供の遊んでいる姿が見えたのである……。」そしてテキストは、ある肖像画(ナポレオンの母レティツィアのそれ)と写真(ナポレオン3世と后妃ウジェニーの間に生まれ皇子ウジェーヌ＝ルイ1856～1879のそれ)をめぐる考察によって締めくくられる。すなわち著者によれば、肖像画と写真は、両者ともに、映像として、それ自体において過去の再現であり、過去を視るという経験を可能にするものであるが、写真は他のいかなる伝統的表象体とも異なって、過去を直接的に再現する無媒介的媒体である。というのも、「版画にせよ絵画にせよ、われわれの祖先が遺してくれた肖像画は、それがいかに生き生きとしたものであろうと、われわれの心のうちにそのような印象を生じさせることはできない。それとはちがって、写真というものは人間存在から発せられた反射光であり、うつろう姿態、瞬間の所作、表情にいたるまでを固定して記録するもの」なのであるから。

このテキストは、上述のロチ作品集において、われわれが以前に訳出したテキスト「昔の写真と今の写真」(『福岡大学研究部論集』Vol. 9, No. 3 平成21年8月)の直後に置かれている。それはおそらく、編者たちが両者をつなぐ共通の思索の糸が写真であると考えたからに相違ない。二つを並べてみると、写真をめぐるロチの考察においては「時間」という要素が本質的に重要な場を占めていることが明白である。事実、写真をめぐるこのロチの直観的見解には、『明るい部屋』でロラン・バルトが記号学的分析の彼方に示した見解を彷彿とさせるものがある(ちなみに、偶然にも——しかしそれは偶然なのだろうか?——いずれの見解とも、ボナパルト家に関する写

真を目にしたときの印象から導出されている点が興味深い。じじつバルトが同書冒頭部で言及している写真の被写体はナポレオンの末弟ジェローム1784～1860である)。さらにその延長線上にはジル・ドゥルーズが『シネマ2・時間イメージ』で展開した精緻な分析があって、それがロチの写真観を照射してくれるということもありうるかもしれない。いずれにしても、「われわれの祖先が遺してくれた肖像画」とは根本的に異なり、伝統的イメージの系列の中に決定的な断絶をもたらしているという意味で、写真を絶対的に現代的なイメージと捉えるロチの直観は、時間や過去をめぐる彼の固有の想像力や感受性に由来するものであると同時に、そこにとどまらず、より普遍的な妥当性を有し、より一般的な射程を持つものでもあると思われる。

\*\*\*\*\*

## 死に絶えた過去の中で

ピエール・ロチ

私は、ほとんど常にといいほど、過ぎ去った時間、いくつもの時期の積み重ねからなる過去の総体にとりつかれている。

事実、しばしば私はつぎのような欲望——唯一絶対に実現しえない、神にとってさえ不可能な欲望——を抱いた。すなわち、ほんの一瞬でもいい、過去に、過ぎ去った時代の深淵に、多少とも遠い昔の早朝のすがすがしさに立ち戻りたいという欲望を。

しかしながら、いくばくか意図して注意を傾けてみると、ある種の特異な時間帯において、夢うつつの状態のうちにはあるが、そうした過去への回帰のなかば錯覚のごときものに陥ることがある。たとえば、長いこと姿を変えることのなかった場所や、人の手が触れることのなかった住まい——いまや古い骸骨となり、いずことも知れぬ地中に散逸してしまっている人々が、かつて生活し、ものを考え、微笑んだところ——に足を踏み入れたときなどがそうだ。あるいは、じつに脆くてはかないものだけれど、ある種の品々は、その所有者たちがはるか以前に灰燼に帰した後にも、奇跡的に残されることがときにあるものだが、そうしたたぐいのものを偶然見つけたときも、そのような感覚を抱くことがある。——そんなとき、私の脳裏には、年老いた人であれ、魅力溢れる若い人であれ、亡くなってしまった人々の姿が、じつにはっきりと浮かんでくるのである。しかしそうした人々も、真昼の陽光のもとでは思い起すことができない。通

常彼らが私の眼前に立ち現れてくるときの、その茫々たる状態は、かわたれどきとたそがれどき、明けそめし黎明と極まりし夕べの性質を、同時に帯びているのである。

ごく近い先祖、今世紀の頭か前世紀の末に生まれ、肖像画を通してその顔や笑顔を知っており、その日常の立ち居振る舞いを人から聞き及び、その人が口にした台詞のいくつか丸ごと私の耳にまで届いている祖先たち、——そもそも、馴染みの品々にかこまれて、すでに今の私たちとほとんど変わらない生活を送っていた祖先たち——、私の眼にはそういう人たちのことが完全な形で見える。しかし、そうしたことがあるのも、春の夕べ、ジャスミンの香り漂う、澄み切った美しいたそがれどきに限るのである。

この組み合わせは、五月の夕べと、あの花々の香りと、過ぎ去った時との間に思いがけず生じるものなのだが、私はそこに大いに魅力を感じている。それに、その理由は自分自身でも容易に説明がつくのである。まずジャスミンだが、それは昔風の植物である。オレロン島にあるわが一族の家の古壁は二、三百年前からジャスミンに覆われている。つぎに、とりわけ、幼年期のある晩のこと、夕暮れ時に、田園の芳香、新しい稜の香り、いたるところ再び芽生えた美しい草木の匂いにうっとりとして散歩から戻ってくると、わが家の中庭の奥に、祖母とバルト大祖母<sup>1</sup>がそこで、薄暗がりの中、いまだぼんやりと見分けのつく白い花の咲く垂れ下がった枝の下（またしてもジャスミンの老木）で、ベンチに腰掛けて涼んでいるのをみつけた。ふたりは、自分たちの姉妹で、(1920年前後の頃)事故でかなり若くして亡くなった人のことを語り合っているところだったが、その姉妹もまた、その当時の春の夕べ、この中庭でよくギターに合わせて遅くまで二重唱を歌ったりしていたのだという……。そのとき、突然、過ぎ去った時の印象が私の脳裏をよぎった。それは生まれて初めて感じた、じつに鮮烈で、はっとするような、ほとんど恐ろしいとさえ言えるほどの印象で、もはや私自身に確実に属しているとは思えないような諸々の感覚の記憶を伴っているのであった……。

亡くなったその二人の若い娘のことが私のいる前で話題になることは、それまで一度もなかったので、身を震わせながら近づいて行って、気持ちを集中し、おそるおそる、しかしながらむさぼるように二人の話に聞き入った。ああ！彼女たちが歌っていたその二重唱、この同じ場所で、同じような五月の夕べに響き渡っていたその声！……かつてあの心地よい調べを、たそがれどきの同じ静けさの中で奏でていた唇、喉、ギターのコルム、いまは灰塵と化している……。そして、老いさらばえて死期も迫っている二人の身内が、そうしたことを思い起して

<sup>1</sup> 母方の祖母アンリエット (1788～1868) とその義理の妹ラリー大祖母 (ロザリー、1789年～1880年)。

いるのだ……。私は話を聞き、二人の容貌についておずおずと質問してみた。「どんな顔だったの、誰に似ていたの？……」すでに私の人生には、人間の突然の消滅とか、家系ないし一族なるものの盲目的な継続とかいう、闇につつまれた受け入れがたい謎が立ちはだかっていた……。そのころの春はいつも、夕方、そのジャスミンのアーケードの下で、あの二人の少女、未知の私の大叔母たちのことに執拗に思いをめぐらせたものだった……。そうやって、くだんの連想が私の心の中で永遠に形づくられていったのだ。

つい先ごろ、去る五月の夕方のこと、私は、この閑静な境界、昔から見慣れた周囲の家々の上に徐々に美しい光が消えてゆく様子を書斎の窓から眺めていた。アマツバメたちが、狂喜してぐるぐる旋回したり鳴いたりした後、今や夕闇に怖気づいて、リーダーが合図でもしたかのように、全体が一度に静まり返り、めいめいが瓦屋根の軒下の巣にもぐりこんでしまっていて、彼らのいなくなった中空にはすばしこくて目にもとまらぬコウモリたちが飛び交っていた。ばら色の残光が上空を漂い、いまや古い家々の屋根の端をかすかに照らすばかりで、やがてさらに上方に昇ってゆき、限りなく深い虚空の中に消えてゆこうとしていた……。本当の夜が訪れつつあった……。

ジャスミンの匂いが突然近所の庭から私のところに漂ってきた、——そしてそのとき私は過去のことを思った——、といってもそう遠くない過去、その当事者たちが、死者を貪り食う地面の下でいまだ生前の姿形をとどめ、墓地をほとんど傷んでいない自分たちの棺でふさいでいるような過去のことを。首に1830年頃の重ね巻きネクタイを巻いた男たち、髪を毛巻紙でセットした女たち、かつてみながその死に心から涙した——そしていまやもう忘れられつつある——祖父や祖母であったところの哀れな残骸……。おそらく、地方小都市の変化の乏しさのおかげで、私の眼下に広がるこの境界は、そのとき私の想像力を捉えていた時代からあまり変わることがなかったにちがいない。わが家の真向かいにあり、かつて祖母の一人が住んでいたあの古い家もずっと同じだった。そして、薄暗いのも手伝って、私は全神経を集中させて、今に続く時がまだ始まっていなかった当時のこと、六十年から八十年も前のその日のことを思い浮かべようと試みた。——もしも、この正面の家の扉が開いて、そこからほとんど覚えていないあの祖母が出てきて、ジゴ袖で、奇妙な髪形の、いまだ若くて美しい姿を現わしたなら。同じその頃のアクセサリーをつけて散策する他の女性たちも現れて、通りを軽やかな人影でにぎわせるようなこ

とがあれば……。ああ、なんて魅惑的なことだろう、なんて憂鬱な娯楽であろう、1820年か1830年の五月の黄昏時のこの境界の光景を、そして、当時の若い娘たちが古めかしい衣装と身のこなしで、夕涼みに散歩に出かけたり窓辺に姿を現わしたりするところを、たとえ一瞬でも再び目にすることができたなら！……

……………

そんなことがあって、次の夜のこと、私はくだんの白昼夢の間にかくも強烈にみずからの眼前に思い描いた光景を夢の中で見たのである。つまり、いままさに終わろうとしている今世紀の最初の四半期頃の、とある五月の夕暮れ時の光景を。生まれ育った町の、ほとんど変わっていないが、かなり気味の悪い薄暗がり降りている通りを、私は同年代の誰かと散策していた……。誰だかはよくわからないが、たいてい私の夢に出てくる人物がそうであるように、目に見えない、純然たる霊のような存在、——たぶん姪だろうか、あるいはレオか、いずれにしても、私と常日頃から考えが通じ合い、私と同じように過去の強迫観念にとらわれている人物。そして私たちは、まれで、ただ一度の、変わりやすく、留めおくことができないと分かっているこの時、なにがしかの摩訶不思議な技によって蘇った、かくも深く埋もれた過去の時を、何ひとつ見逃すまいと目を凝らして見つめていた。——もとより、そういったものにじっとしているよう求めても無駄であることは十分感じ取っていた。ときに、それらの映像は一瞬、忽然として消えたかと思うと、ふたたび姿を現し、そしてまた消えるのであった。それは、明滅する青白い幻灯の影絵のようなもので、持続するのが非常に困難な意志の力によって、死の影のかくも分厚い層を貫いてようやく現れてきたと思しきものであった。——私たちは、魔法の杖の一振りによってすべてがふたたび大いなる漆黒の夜の中に沈んでしまう前に、見られるものは見よう、できるだけ多くのものを見ようと思ひ、ちょっとばかり泡を食ったように歩みを速めた。自分たちの家のあるあたりに早く着かないか早く着かないかと待ち遠しくてしかたなかった、親族のだれか、見覚えのあるご先祖様のだれか、——あるいは、ひょっとして、夕べの散歩、五月の草花摘みから戻る途中の、いまだごく幼い頃のお母さんやクレール叔母さん<sup>2</sup>に会えるのではないかという期待に胸を弾ませて……。通りがかりのひとたちも帰りを急いでいて、家の中に入るや早々に戸を閉めては姿を消してゆく、——通りの真ん中をさまよい歩く習慣をなくし、蘇ったことに少々不安を覚えている亡霊たちのように。女たちはジゴ袖の服をまとい、ジラフ櫛<sup>3</sup>をさし、時代遅れの帽子をかぶっているが、そのあまりに時代遅れな様子に私たちは、胸をつ

<sup>2</sup> 父の妹クラリス・テクシエ（1823～1890）。

<sup>3</sup> ジラフとはフランス語でキリンのこと。王政復古期に流行した櫛。

かまれるような思いと得体の知れない恐怖感にもかかわらず、ときに笑みを浮かべてしまうのであった……。物憂い風が、ことに街角に吹いては、漠とした薄暮の中、逍遙する女性たちの少しばかり滑稽なスカートや小さなショールやスカーフを揺らし、それがまた彼女たちによりいっそう亡霊じみた様相を与えていた。けれども、そうした風にもかかわらず、そしてそんな不吉な薄暗がりにもかかわらず、あたりはまぎれもなく春なのであった。菩提樹の花が咲き、古壁の上にはジャスミンが芳香を放っていた……。私たちのすぐそばを、まだごく若いカップルが、心から愛し合っているといった感じで腕を組んで通っていったのだが、その容貌にどこかしら見覚えのあるのに気づいて、私たちはいっそう注意深く二人の顔をしげしげと見つめた。「あら、と、姪がなかば感動したような、悪気のない、なかばからかうような調子で言った、あのドゥガさんのところの老夫婦じゃないの！」（はじめだれかよくわからなかった私の道連れの例の人物は、結局、姪となっていた。私の傍らを、彼女もまた急ぎ足で、ほとんど小走りになって歩いてゆく姿が、いまだにはっきりと目に浮かぶ）。

なるほど、老デュガ夫妻にまちがいない。私自身も誰かに似ているなと思っていた、その誰かであった。私たちは胸がいっぱいになった。必ずしもその二人のせいというわけではなく、この一群の移ろいやすい幽霊たちの中に、やっとだれか知っている人を見分けることができたという、ただ単にそのことに感動したのである。これによって、突如として、この過ぎ去った時への旅がより心を打つ真実の魅力を帯び、この消え去ったものごとの再現ショーが、よりいっそういわく言いがたい憂愁を湛えるようになった……。

あの老ドゥガ夫妻、彼らに出会うなんてことはこれっぽっちも考えていなかったが、その二人が、なんと思いがけない姿で私たちの傍らを通り過ぎて行ったことか！……二人のグロテスクな人物、昔この近所でよく見かけて知っていた二人、私たちの子供時分からもうすでに老いぼれて動くのもままならない彼らは、子供から見ると、きっと昔からずっとそんな風だったのだらうと思わせるあの老人たちに属していた……。夕風がそよ吹く中を、いかにも若い恋人どうしといった感じで、颯爽と歩いてゆくのはまぎれもなくあの二人だった。彼女の方は、じつにうら若く、うつむき加減で、当時の大ぶり帽子をのせた黒髪は、かなりおしゃれにセットされている。ふたりとも、人よりことさらに滑稽というわけでも醜悪というわけでもなく、ひとり若さのなせる魔法の力によって姿かたちを一変させ、移ろいやすい春のひと時と恋の季節をひとなみに楽しんでいるといった様子……。こうしてあの二人、あのドゥガ老夫妻にも、恋をしているとき、若いときがあったのだということを目の当たりにすると、愛と青春というもの——唯一生きるに値すること

がら——がふたつながら壊れやすいものであるということが、なおいっそう悲痛な思いを伴って理解されるのであった……。

これとはまた別に、ごく最近、コルシカでのこと、同じく過ぎ去った時間をめぐって胸を刺すような印象に捉えられた。

はじめて訪れたアジャクシオで、着いてまもなく、友人たちに連れられ、ナポレオン一世の生まれた家を見に行った、——それもやはり春のことだった、——フランス本土より暖かく、曇り空の下、どんよりとした春、オレンジの木や、その他、アフリカ産のものに近い正体不明の植物の匂いが漂う春。——行く前には、その家にはたいして興味がなかった。もとより、旅行案内書でお勧めの場所として出ていて、だれもが足を運ばねばと考えるようなところはどこでもそうなのだが。そんな場所にはすこしも興味がわからず、いかなる感動も期待してはいなかった。

しかしながら、行ってみるなり、当の界限は私好みのなかなかいところであった。見たところ、隣近所の家々は、あれほど世界をかく乱した人物の子供時代以来、おそらく何ひとつ変わっていないという感じであった。

なかんずく当の生家は当時そのままの姿であって、足を踏み入れるなり、夕暮れ時とまわりの静けさも手伝って、過去が地下の闇の中から私のもとに姿を現しはじめた——いつものように、すり減った階段や、壁の色あせた漆喰や、18世紀の靴についた泥を取るために敷居のところに据えられた鉄のかきとり具といった、どうでもいような事物に呼び起こされて……。——過去が、注意を傾ける私の頭の中で、幽霊のように、ざわざわと動き出したのである……。

まず、それは中庭から、背の高いごく古びた家々に囲まれた、うらびれて緑のない、ずいぶん古い中庭からはじまった……。そこで、昔の衣服に身を包んだ、後に皇帝となった風変わりな子供の遊んでいる姿が見えたのである……。

各部屋は、夕暮れ時に入ったものだから、よろい戸が全部閉じられていて、明かりといっても、その隙間から漏れてくる明かりしかなく、それによって一段と神秘的な雰囲気が増すような心地であった。この大邸宅の中の品々は、どれも気品を湛え、上品な香りを漂わせていた。当然のことながら、当時のことを考えてみれば、この家の主人はたいそう裕福な人たちだったにちがいない。そしてまた、過去の印がいたるところに深々と刻まれていた！ルイ15世あるいはルイ16世様式の虫に喰われた家具のほこりの匂いやひどいいたみのせいで、すっかり打ち捨てられてしまっている感じ、墓石のごとくに動かなくなってしまう感じが、ごく容易にもたらされていた。それはまるで、歴史上の人物である主人たちがそこを出

て以来、やがて百年にもなろうとする長いあいだ、誰もそこに足を踏み入れていないといった様子であった。ほとんど人気のない小さな通りに面した小さな食堂には、真ん中にいまだ食器が並べられた彼らの食卓があって、古風な形の奇妙な椅子がそのまわりに置かれていた、——すると少しずつ、その日とおそろしいほどよく似たある春の日の夕方、屋根の上に同じ鳥たちがさえずり、あたりに同じ匂いが漂う中、一家の夕餉の光景が目には浮かんでくるのであった。亡者たちにとっては具合のいい薄暗がりの中、いまや彼ら全員の姿が、着ている服や顔立ちとともに、私の目の前によみがえってくる。青白い顔をしたレティツィア夫人が、少々奇妙な気配を漂わせた子供たちに囲まれて座っている。その子供たちの将来のことが、謹厳な心の持ち主である彼女にはすでに気がかりなのであった……。考えてみれば、彼らの時代はわれわれの時代のほんのすぐそばにある。奥深く起源のない時間の連なりの中では、われわれはいまだほんの隣どうしなのだ……。

つづいて、私の考えは、その皇帝の母親から、名もないこの私の母親の方へと移っていった。すると私は——この感情を説明することはいかにもできないのだが——突然かくも明瞭によみがえってきたこのボナパルト家の夕餉の光景は、私の母がこの世に生まれてくる半世紀以上も前の光景なのだということに思いが至ると、不意にある悲しみ、奈落の眩暈のごとき感覚を覚えたのである——私にとっては常にかげがえのない存在であり、この上なく確固たる不動の存在である母、破壊と虚無へのこの上なく暗鬱な恐怖に捉えられたとき、いまだに残る、幼子が抱くような信頼感をもって、常に身をすり寄せる人であるその母が、である。

これをどう言い表したらいいのかわからないが、しかし私にとっては、母の生まれたのが何ものよりも前のことであり、いまだ私の心を安らかにしてくれる母の信仰が少しは遠い過去に端を発しているのだと思うことができたなら、その方が好ましいのである、——母の魂が、肉体の死を超え、終わりなく続くものであることを無定見にも願うのと同様に。そう、われわれの生きている時代とすでにかくも似かよっていながら、母がまだ存在していない時代のことを考えると、私は面食らってしまうのだ。思うにそれは、人間存在の巨大な渦巻きと無限の時間の中では私と母もふたりながら無に等しいものであるということ、新しい角度から、よりいっそう失望させるような形で感じ取ることなのである。

注意力というもの、何がしかの対象に集中しすぎると、たちまちのうちに疲れて散漫になってしまうものだ。私は皇帝の生家の見学を続けたが、いまや何ということなしに他のことに考えが逸れて、見学そのものに対する興味は失せてしまっていた。

それでも私はさらにかの人物の質素な寝室を見学した。彼がエジプトから戻ったとき、最後に寝たと言われている青年時代の寝室である。細かな部分まで手の行き届いた、たいへん立派なものであった。オレロン島にある古いわが家にも、これと似た寝室で、彼とほぼ同年代のユグノーの大叔母がかつて使っていた部屋があったのを覚えている。

しかし、私にとってこの場所の精髓であり恐怖の源泉をなしたのは、レティツィア夫人の部屋に飾ってある、彼女の肖像画である。それは、飾られている位置の光の加減で最初気がつかなかったが、帰りがけに目に留まり、私の歩みを止め、その前を通りがかった私をぎくりとさせたのである。金メッキのはげた楕円形の額縁の中、かびのついたガラスの下に収められている色の落ちたパステル画、黒の背景に浮かぶ青白い顔。顔はかの人物に似ている。同じ有無を言わせぬ眼、メッシュが頭皮に張り付いたような厚みのない髪。じつに強烈なその表情は、なにかしら愁いを帯び、凶暴で、懇願するようなどころがあり、もはや存在しなくなることへの苦悶に苛まれているといった感がある……。顔がどういふわけか枠の中央からずれてしまっている、——それはまるで、みずからをつつむ夜におびえつつ、この楕円の暗い穴にひそかに顔を近づけて、曇ったガラス越しに生者の営み——なにかんづく息子が築いた栄光のその後——を眺めようとしている死者のようであった……。かわいそうなひと！彼女の肖像画の傍らには、虫に喰われた古い部屋の整理ダンスの上に、ガラスの覆いに覆われた「ベツレヘムのクレッシュ」があって、そこに子供のおもちゃのような象牙の人形が飾られている。聞くところによると、これを贈り物として遠征先から持ち帰って届けたのは彼女の息子なのだそう……。栄光に酔いしれる息子、それでもなお息子のことが心配で、厳しく、悲しげで、慧眼な母親、彼らふたりがどんな様子で一緒に過ごしたのか、ふたりの愛情のほどがどれほどのものだったのか、ぜひそれを知りたいものである……。

かわいそうなひと！なるほど、彼女はまぎれもなく夜の世界に住んでいるのであり、いまや消え入りかけている皇帝の栄光の輝きをもってしても、彼女の名前をいくばくかの生者の記憶にとどめておくことは容易ではない。——かくして、くだんの男が伝説の古い英雄たちに劣らぬ不滅の地位を獲得したところでなんになろう、半世紀も経たぬうちにその母の存在は忘れられてしまうのだ。彼女を無から救う手立てとして、わずかに二、三枚の肖像画が残るだけという有様で、そのうちの一枚が問題の肖像だが、それともうすでに消え失せつつある。そうすると、われわれの母——われらが無名の者どもの母——、彼女たちのことなど、一体だれが思い出してくれるというのか？われわれがこの世を去れば、一体だれが

彼女たちの愛しい姿を記憶に留めておいてくれるというのか? ……

あのパステル画の向かい側、その同じ部屋の反対側の隅に、もう一つ、わびしげな小さな物があって、それが、降りゆく夕闇の中、いまいちど私の注意を引く。木製の質素な額縁に収められ、壁にかけられた黄ばんだ一枚の写真である。そこに写っているのは、十二年ほど前に非常に若くしてアフリカで亡くなったあの皇子、そのごく幼い頃の、短ズボンをはいた姿である。先の皇后ウジェニーが、胸を打つ、妙な気まぐれから、ナポレオン家の末子である息子<sup>4</sup>の記念の写真をそこに、もう一人のナポレオン、世界を大きく揺り動かした偉人の生まれたその部屋に置いたのである……。

いまから百年か二百年後、われわれの曾孫たちのだれかが、自分たちの祖先や死んだ子供たちの写真を一枚一

枚つぶさに眺めてみると、どんなに悲痛で不思議な感じがすることだろうかと考えてみる。版画にせよ絵画にせよ、われわれの祖先が遺してくれた肖像画は、それがいかに生き生きとしたものであろうと、われわれの心のうちにそのような印象を生じさせることはできない。それとはちがって、写真というものは人間存在から発せられた反射光であり、うつろう姿態、瞬間の所作、表情にいたるまでを固定して記録するものなのだが、そのようなものである写真は、未来の世代の者たちにとって、今まさに生きているこの私たちが死に絶えた過去の中に帰っていった後にあらためて見るものとして、どれほど見てみたいという好奇心をかきたてるものであり、また見ればぞっとするほど恐ろしいものであろうことか……。

---

<sup>4</sup> Napoléon Eugène Louis Jean Joseph Bonaparte (1856~1979年)、ナポレオン4世。